九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『智恵鑑』修訂考

勝又，基
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9369

出版情報：語文研究. 89, pp.33-44, 2000-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『智恵鑑』修訂考

勝又　基

一　はじめに

『智恵鑑』は、『女四書』『倭小学』『見ぬ世の友』などの著者として知られる近世前期の仮名草子作者・辻原元甫による教訓物仮名草子である。上智・明智・察智・膽智・術智・捷智・語智・兵智・閨智・雑智の一〇に分類し、智恵を巡る中国説話を漢字平仮名交じり文で記している。

『智恵鑑』については、中村幸彦・木村三四吾『近世文学未刊本叢書　仮名草子篇　一』(注1)(以下「未刊本叢書」と略称)の翻字と解題とが内容・典拠・作者などを総合的に論じた先駆的な業績である。典拠に関しては目加田さくを「智恵鑑の典拠論1　―智嚢との関連よりみたる―」(注2)、花田富二夫「近世前期に於ける中国文学影響の一断面　―智恵鑑周辺―」(注3)が深めている。

未刊本叢書のうち、諸本に関する部分を左にあげてみる。

初版は室町通鯉山町小嶋彌左衛門梓行と、跋の末欄外に陰刻してあり。再版は同じ場所に二条通玉屋町上村次郎衛門刊行と陽刻してある。なほこの場所の文字を削って他肆より出した後刷もある。

同叢書の口絵には、初版とする小嶋本と再版とする上村本との刊記が並べて掲載されており、問題の整理の為に簡便である。ちなみに上村本を「再版」とするが、実際には新たに彫り直した訳ではなく、同版木を用いたものである。中野三敏『書誌学談議　江戸の板本』(注4)は整板本書誌を考えるための重要な視点として、刊・印・修を明確に区別する事を提唱しているが、それに基づいて言い直せば、小嶋弥左衛門刊本の上村次郎衛門求版本、とすべきところであろう。

さらに同叢書の翻字中、巻五目録の最終章「十三　宋の种衡弓の稽古さする事」の下には、「初版ナシ再版ニヨリ補フ」との注記がなされている。すなわちこの目録の一行の有無は、『智恵鑑』の刷りの如何を問う上でひとつの重要なポイン

トとなっているのである。

要するに、

初版本…小嶋弥左衛門刊。巻五目録一二章まで。

再版本…上村次郎衛門刊。巻五目録一三章まで。

という分類がなされた訳である。

この分類は現在まで、ほぼそのまま用いられていると言ってよいが、若干の揺れも見られるようである。例えば『池田家文庫総目録』(注5)は、同文庫所蔵の『智恵鑑』(小嶋弥左衛門刊)に関して次の様に記している。

初刊本は二百話の由であるが、これは五巻一三話が加わり、二百一話となっているので、再刊本と見られる。

この記述が中村稿を直接に踏まえたものか、他に参考文献があってのものかは明らかでないが、目録の増減とせず、話数の増減としている点で一歩踏み込んだ言及となっている。

岩波書店『日本古典文学大辞典』(注6)も、

以上の十智について、その下に総計二百話(再版本二〇一話)からなる。

とする。明治書院『日本古典文学大事典』(注7)は、単に「計二〇〇の説話からなる」とする。

このほかに小嶋本・上村本からさらに下った後印本の刊記についても相違が見られる。未刊本叢書では「この場所の文字を削って他肆より出した後刷」とするのみであったのに対し、岩波書店『日本古典文学大辞典』は次のように記す。

初版は「室町通鯉山町小嶋彌左衛門梓行」と跋の末欄外に陰刻があり、後刷は同じ所に「二条通玉屋町上村次郎衛門刊行」と陽刻する。他に、この場所に他書肆名を入木した後刷本もある。

「この場所に他書肆名を入木」と特定した点で一歩踏み込んだものと言えよう。

このように諸説で揺れのある『智恵鑑』の諸本関係について、この度整理を試み、若干の新知見を得た。特にその初期における諸本関係をあらかた報告しておきたいと思う。

二　小嶋本の二種

先にも触れた未刊本叢書に掲載される『智恵鑑』二本の口絵写真には所蔵者が記されていない。しかし本叢書は天理図書館蔵本を中心としたものである。天理図書館には、小嶋弥左衛門刊本(913・61/イ221)、上村次郎衛門求版本(913・61/25②)(注8)の二本を蔵するゆえ、この二本が撮影されたものであろう。本稿は初期の諸本関係について述べるものであるため、以下「天理本」と言えば、小嶋弥左衛門刊本の方を指すものとする。

所見の範囲で小嶋弥左衛門の刊記を持つものは、この天理本の他には、玉川大学本(W91351/4)、京都大学潁原文庫本(Pb/12)、筑波大学本(タ480/1)、岡山大

学池田家文庫本（貴九一三／二九）、大英図書館本[注9]の五本が存した。これらに関し、気づいた所を二点指摘しておきたい。

まず第一点は、小嶋本に二種存するという事である。というのは、天理本において初印本＝小嶋本の特徴と考えられてきた巻五目録の第一三章の欠落が、天理本を除く全ての小嶋本では既に補われているのである。つまりこの箇所は、上村へ板木が移ってから改められたのではなく、既に小嶋の手によって訂正がなされていたのである。以後本稿ではこの点より分類し、「小嶋早印本」（天理本）、「小嶋修訂本」（玉川大本・京大本・岡山大本・筑波大本・大英図書館本）と呼ぶ事とする。

もう一点はこれと関連するが、この巻五の一三は、目録には有る物と無い物とが存するけれども、本文自体は小嶋本の全てに存した、という事である。先にも触れた通り、未刊本叢書は翻字の中で、この巻五目録の第一三章の下に「初版ナシ再版ニヨリ補フ」という注記を施していた。この記述が、本文にまで増減があったと言っているのではなく、目録のみの増減を指すものであるという事が確認できた訳である。

従来『日本古典文学大辞典』等では『智恵鑑』の話数を二〇〇話本・二〇一話本に分類していたが、実際には本文の話数が二〇〇話の諸本は存在しないのである。今後は未刊本叢書の示した通り、巻五の目録が一三章か一二章かという点で判断せねばならない。

例えば先にも触れた『池田家文庫総目録』は、総話数が二〇〇話でなく二〇一話であるという所から所蔵本を再刊と見なしたが、先にも述べた通り本文が二〇〇話の諸本は存しないゆえ、話数ではなく巻五目録によって判断せねばならない所である。なおこの池田家文庫本は、巻五目録に第一三章を持つので、小嶋修訂本という事になる。

三　東大本について

小嶋本の二種とその先後が明らかになり、では小嶋早印本である天理本が初印と言いうるかといえば、なお一考を要する。従来指摘されたものを見ないのだが、『智恵鑑』には、なお早い時期に刷られたと思われる一本が存するのである。それは東京大学附属図書館蔵の一本（請求番号E24／1392。以下「東大本」）である。

この東大本は一〇巻一〇冊。表紙は後補と思われ題簽は無く、東大特有の鞘表紙により三冊に合冊されている。[注10]先に触れた未刊本叢書の写真に見える左側欄外の陽刻・または陰刻の刊記は存しない。すなわち無刊記本なのであるが、本文は従来と大きく異なるものであった。

東大本が小嶋本に先んずる早印本である事の明白な根拠として、数字に関する修訂箇所を挙げてみることとする。まず巻一の第廿九章の章題番号が、小嶋本では早印・修訂本とも

に「廿九」となっているのに対し、東大本では「廿五」となっている【図版一】。

また、巻九の十五丁表に存する第十一章の章題番号が、小嶋本では「十一」となっているのに対し、東大本では「十二」となっている。どちらも前後の章番号より見て小嶋本の方が正しいのは明らかであり、小嶋本が修訂後のもの、東大本がより早い印本と言えるのである。

この東大本（無刊記）から小嶋早印本（天理本）、さらには小嶋修訂本（京大本他）にかけて彫り改められた箇所は、当然ながら先に挙げた数字のみではない。次に気づいた範囲でそれらを挙げておくこととしよう。全て上段が東大本、下段は小嶋修訂本のうち京都大学本の本文によった。その中間に位置する小嶋早印本（天理本）は、該当する本文の方に◆印を冠した。(注11)

【図版一】巻一の二九表題番号（四十九丁裏一行目）

東大本

小嶋本（京大本）

巻・章	丁・行	東大本	小嶋修訂本（京大本）
序文	二表五	照すへし	◆磨くへし
一の一	四裏三	もとい	◆もとひ
一の五	一一表五	我も〳〵	◆いつれも〳〵
一の七	一三表四	くらいて	◆くらひて
一の一二	二二表五	給ふといへども	◆給ふにより
〃	二三表八	不忠不義の至極なり	◆天おそろしき事共也
一の一三	二四表二	とはれければ	◆とはれけるに
一の一五	三十表四	開ざる法にて	◆開ざるにより
一の二一	三九表二	いきどをる心	◆いきどほる心
一の二七	四十六表六	衣裳を着給へる事なとは	◆衣裳を着給へるの類は
〃	四十七表七	長久のもとゐを	◆長久のもとひを
〃	四十七表一〇	ある程の財宝は	◆ちりたる財宝も
〃	四十七裏一	わが御財宝とおなじ。然れば	◆わが御財宝なり。しかるに
一の二八	四十八表八	しかるに子路は又ある時	◆しかるに又子路はある時
一の二九	四十九裏一	◆廿五	廿九
〃	五十表五	取さはきをもいたさすへき	◆取さはきなどいたさすへき
〃	五十一裏九	氏種姓にもかまはす。その	◆氏種姓品形にもかまはす。其
〃	五十二終表一	心がけ給ふべき事ならずや	◆心がけ給ふべき事なるへけれ

二の一	三裏一	営丘といふ所を		万事に渡りて此心持あるべし人間一生の仕合さいわひをうる事はまれなる物にて不仕合なる事はおほき物なれは若天道に叶ひて得かたき幸を得時にあひいきほひにのる時節侍らは其時を失はさるやうにと夜を日につぎてつとむへし努ゝ此時を取はづしたり共又重ねてもよき事あらんなどゝ後だのみして油断すへからす
〃	四表五	万事に渡りて此心持あるべき事ならずや		営丘といふ所へ
二の二	五表一〇	腹立し給ひける時		腹立し給へり其時
二の五	十表一	此事を諸国の牢人聞及び		此事を天下の諸侍聞及び
二の六	十裏四	つぎ〳〵のもの		つき〳〵のもの
〃	十一裏一	役ミある物なるに		役ミある物なれは
〃	十一裏二	そなはりたらん人の		そなはりたらん人は
〃	十一裏三	味噌塩の吟味迄せられんはたつとき徳にはそなはりなから。そのたつとき所をしられさるおろかなる心なる故。みづからは君の御ためと思はるべけれ共かへりて不忠となりゆき侍るべし		味噌塩の吟味を詮要とせらるへき事にあらす。よし聚斂の利勘を専として財宝あつまるといふとも財あつまれは民散ずる道理なれはかへりて不忠となりゆき侍るべし

二の八	十五裏一	人これをおそれず	人これをあなどり	
二の九	十六裏二	ふがひなく	ふがいなく	
二の二三	四十一表五	申れは	申けるに	
二の二七	四十六裏四	いひけれは	いひけるに	
〃	四十六裏六	かひに行事ならずして	かいに行事ならずして	
二の二八	四十八終裏七	政務のたよりともなる事も	政務のたよりとなる事も	
三の二	四表二	◆所司代せられける時	諸司代せられける時	
三の五	七表七	決断なかりけれは	◆決断なかりける故	
三の一〇	十三表一	なりがたかりけれは	◆なりがたかりし処に	
三の一一	十五表七	とはれけれは	◆とはれけるに	
三の十四	十九表四	彼子聞付	◆あるし聞付	
四の二	四裏七	はげまざりけるゆへ	◆はげまさるにより	
四の三	五裏一	思ひけるに	◆思ひけるが	
四の八	十二表八	燕の国をうつべし	◆燕の軍と戦ふべし	
〃	十二裏三	きのふけふ迄	◆けふ此比迄	
五目録	一裏五	◆（記載なし）	十三　宋の种世衡弓の稽古さする事	
五の一	二裏五	君の馬を三だんにわかち	◆互の馬を三だんにわかち	
〃	二裏六	上中下と定めをきて	◆上中下と定めをくに	

五の二	四表九	勅錠ありければ		
〃	四表一〇	弁にまかせてのべける故	◆勅錠ありし故	
〃	四裏七	天下国家をたもたん人は	◆弁にまかせてのべければ	
五の七	十一表一	これよりおこり侍る也。穆生があま酒をまふけざりしより楚の国をさり。華元が御ひつじのあつ物およばざるをうらみて鄭のいくさにかけいり。華元をいけどらせし類。大将たる人のわきまへ心がくへき事にあらずや人のおもひつゝも。又はうらみをふくむ事も。いさゝかなる事よりおこりて。或は忠動をぬきんで。或は仇かたきともなる事也	◆天下国家をたもたん君は ◆是よりおこり侍る也。穆生があま酒をまふけざりしより楚の国を去。子公か亀のあつ物あづからざりしを憤て。鄭の霊公を殺し奉り。羊斟か羊のあつ物及ばざるを恨て。鄭の軍に懸入華元をいけどらせし類。大将たる人の弁へ心がくへき事にあらずや。人のおもひつゝも。又は恨をふくむ事も。聊なる事よりおこりて。或は忠動を抽で。或は仇かたきともなる事也。爰を以て毛詩の語にも民の徳を失ふ乾餱以て愆つとあるをや	
五の九	十三表二	あたりければ	◆あたりける故	
五の一〇	十五表四	◆十三ケ条をあげて	十二ケ条をあげて	
五の一一	十六表九	讒言するものかありて	◆讒言するものなど有て	
六の四	七裏七	四つのさばきやうある事を	◆四つの見たてやうある事を	
〃	七裏八	察するを第一とし給り	◆察する法ありとかや	
六の五	八裏四	かの弁慶かあたかにて義経をうち奉りしも異域同情の捷	◆其外宇文泰の敗軍せられける時。落馬して只一人おられけるを	

六の一〇	十五表七	智ならすや	都督李穆か見付参らせて其まゝ杖にて背を打参らせけるも是に同しかの弁慶があたかにて義経を打奉りしも異域同情の捷知ならすや	
六の一五	十八終表七	手にしたがひて	◆水にしたがひて	
七目録	一表四	何のあいしらいも	◆何のあいしらひも	
七の二	四裏一	二　斉の淳于髡鵠をにがす事	◆二　斉の淳于髡鵠をにがす事	
〃	四裏二	斉の淳于髡鵠をにがす事	◆斉の淳于髡鵠をにがす事	
七の三	六表九	楚の国へ鵠と云鳥	◆楚の国へ鵠と云鳥	
七の五	八裏四	えいつぶれおりて	◆えひつぶれおりて	
七の七	十一表六	これにをぢ給へる事	◆これにはぢ給へる事	
〃	十一表一〇	いひてすでる	◆いひてすでに	
七の八	十二裏五	朕が仁	◆わが仁	
七の一一	十六裏八	てうあひのあまり	◆てうあいのあまり	
七の一二	十九裏五	むかひ仰けるは	◆むかひ給ひて	
七の一三	二十裏四	のむべしといふ時	◆のむべしといへば	
七の一六	廿四表五	うばひあいて	◆うばひあひて	
七の一七	廿六表七	◆其後	其かみ	
〃	廿六表七	御てうあひ	◆御てうあい	
七の一七	廿九表六	申上けれは	◆申上る所に	

七の一八	卅三表五	◆誠に無質のそしり	誠に無実のそしり	
七の一九	卅五表一	といふ翁又いひけるは	◆といふ時翁云けるは	
〃	卅七表九（注12）	金銀をたくはへ持給ひて	◆金銀をたくはへ積をきて	
〃	卅七表一〇	ついやし給ふといひても	◆ついやしつかふといひても	
〃	卅七裏九	おぼしめして	◆おもひやりて	
〃	卅七裏一〇	およぼし給ひて	◆およぼし恵みて	
〃	三十八表一	やうにし給はんこそ主君の気象とは申さるべけれ	◆やうならんこそあらまほしき仁心なるべけれ	
七の二〇	三十八裏二	参らせければ	◆参らせけれ共	
〃	四十裏八	これをいひたてにして	◆これをとりことにして	
〃	四十二裏三	はなはたしき所に	◆はなはたしかりしに	
〃	四十二裏五	夜昼となく	◆帯をたに解て	
八目録	一裏七	十五　唐の令狐潮わら人形を作る事	◆十五　唐の張巡わら人形を作る事	
〃	二表四	廿二　晏州の卜漏猿に火をつけさする事	◆廿二　輪囲の山城へ猿に火をつけさする事	
八の一	三裏七	やかれけると心得	◆やかれけるぞと心得	
〃	四表七	高詛	◆高祖	
八の三	七裏一	自由につかい用ひて	◆自由につかひ用ひて	
〃	七裏六	きおひかゝり	◆きほひかゝり	

八の八	十三表一〇	かはせられけれは	◆かはせられけるに	
八の九	十三裏七	きおひ懸て	◆きほひ懸て	
八の一三	十七表九	おもひゆだんし	◆思ひてゆだんし	
八の一五	十八表三	唐の令狐潮わら人形を作る事	◆唐の張巡わら人形を作る事	
八の一七	十九裏一〇	まいらせんと思ひ	◆まいらせんとて	
八の二二	廿五表四	晏州の卜漏猿に火をつけさする事	◆輪囲の山城へ猿に火をつけさする事	
〃	廿六表二	はねおどりけれは	◆はねおどりける故	
八の二四	卅裏三	つがいよき所にて	◆つがひよき所にて	
八の二七	卅三裏八	二千人をえらみ	◆二千人をえらひ	
八の二九	卅七表六	うたれけるも又此心也	◆うたれけるもことはり也	
八の三一	卅九裏六	すくいの加勢	◆すくひの加勢	
九の一一	十五表三	十二	◆十一	
九の一三	十八表九	おつとのしがひ	◆おつとのしがい	
九の二三	三十表一〇	かいなき	◆かひなき	
十の一	二裏四	其後とをる刻に	◆其後とをる度ことに	
十の五	十裏四	一紙かろからず。半銭あにうすしとせんや	◆一紙薄からず。半銭あにかろしとせんや	
十の一〇	十七表三	おかみ奉るに	◆おかみ奉れば	

十の一二	十八表二	もとり書籍を板行	◆もとより書籍を板行
十の十四	廿一終表三	うちころしけるとぞ	◆うちころしけるとぞ此故事はさせる點智にもあらされは記すへき程の事ならね共今時沙門の女色にふける事俗家よりも猶甚しけれは此僧の淫乱よく相似たりしに貧儒のたやすく打ころせる所いと快　事に思ひ筆のすさひに書付侍る也よくいひて浮屠を防ぐものは聖人の徒ならさらめやは

異同の内容は、後述するいくつかのものを除けば、仮名遣い・漢字・ルビ・清濁・脱字、また、接続・語尾・テニヲハに留まるものが多くを占める。但しその数は認めた限りで一〇〇を越え、決して少ないとは言えない。

また、ほとんどの部分が小嶋早印本の時点で既に改められており、小嶋修訂本に至って改められたのは、先にも触れた巻五目録の他には数カ所に過ぎないようである。

ここまで見てきた点を踏まえ、『智恵鑑』初期の諸本関係を簡単に整理すると、早い方から次のようになる。

1、無刊記本（東大本）…巻五目録一二まで
2、小嶋早印本（天理本）…巻五目録一二まで
3、小嶋修訂本（京大本他）…巻五目録一三まで
4、上村次郎衛門求版本…巻五目録一三まで

その後の諸本については調査が行き届かなかったが、その後この跋欄外の刊記は削られ、代わりに奥付が付されるようになる。(注13)

四　話末評語に関して

初印と思われる東大本は、書誌的な問題に資するのみならず、『智恵鑑』初期の推敲過程を明らかにしてくれる新出本文でもある。特に、話末評語の部分に異同が少なからず存する点には注目すべきであろう。巻二の一、巻二の六、巻五の七、巻六の五、巻一〇の一四、の五章がそれであるが、以下にその改編の様子を見て行きたい。

これらは大きく分けて、〈一〉類話の増補（巻五の七・巻六の五）、〈二〉評語の増補（巻二の一・巻一〇の一四）、〈三〉評語の変更（巻二の六）、とに分類する事ができる。

〈一〉に分類した類話の増補は、話末に同趣の故事を付け加えるものである。この増補で興味深いのは、紙幅の制限に拘らず、【図版二】のように、改版によって本文の行数を増やし、左記のような逸話を挿入している事である（傍線部が増補箇所）。

巻五の七話末

穆生があま酒をまふけさりしより楚の国を去。子公か亀

のあつ物あづからざりしを憤て。鄭の霊公を弑し奉り。羊斟か羊のあつ物及ばさるを恨て。鄭の軍に懸入華元をいけどらせし類。大将たる人の弁へ心がくへき事にあらずや。人のおもひつゝも。又は恨をふくむ事も聊なる事よりおこりて。或は忠勤を抽で。或は仇かたきともなる事也。爰を以て毛詩の語にも民の徳を失ふ乾餱以て愆つとあるをや

巻六の五話末

其外宇泰の敗軍せられける時。落馬して只一人おられけるを。都督李穆か見付参らせて其まゝ杖にて背を打参らせけるも是に同しかの弁慶があたかにて義経を打奉りしも異域同情の捷知ならすや

こうした増補箇所が、版木を改めてまですべきものであるという必然性を今ひとつ明らかにし得ないが、故事の重要性・信頼性は、現在の我々の感覚より遥かに重かった事をあらためて認識させられる。

〈二〉に挙げた評語の増補とは、もと説話のみであった章段へ、修訂によって話末評語を加えたものである。巻二の一、巻一〇の一四がそれにあたる。

巻二の一「太公望営丘へ入部せらるゝ事」の話末評語は修訂で加えられたものである。東大本では話末に「万事に渡りてこの心持あるへき事ならすや」とするのみだったが、修訂本では「この心持」の内容が詳細に記されているのである。

【図版三】に見る通り、この四丁表は、もと五行ほどで終わっていたのであるが、修訂本ではスペースいっぱいに書き込まれている（ちなみに同丁裏は挿画）。〈一〉の類話の増補に対し、〈二〉の評語の増補は版木のスペースに左右される面が強いようである。版下を版木に刻した際スペースが生じた事が、こうした増補への契機となったものと思われる。

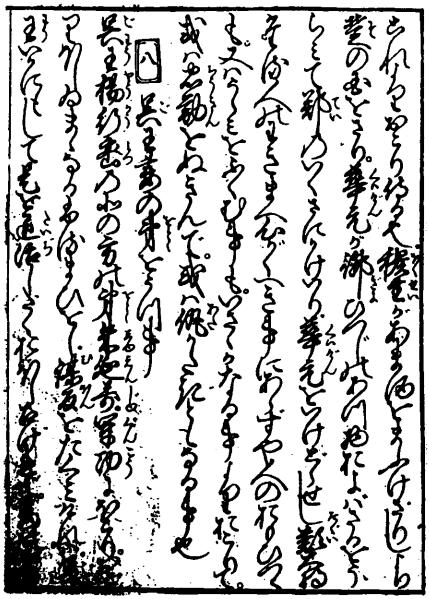
『智恵鑑』の最終話である巻一〇の一四「酒徳利にて僧を打事」も、〈二〉に属する話末評語が増補された章段である。呉の国の貧しい学者が僧の家に下宿していたが、僧が酒色に溺れる証拠を偶然に目撃してしまう。僧に絞め殺されそうになった学者は、最期にと酒を一杯所望し、僧がその用意をしている所を逆に酒徳利で打ち殺す、という話である。

先にも述べた通り、この章の話末評語は後印本で書き加えられたものである。修訂時に念を押すがごとく書き加えられた次の話末評語には、注目せねばならないであろう。

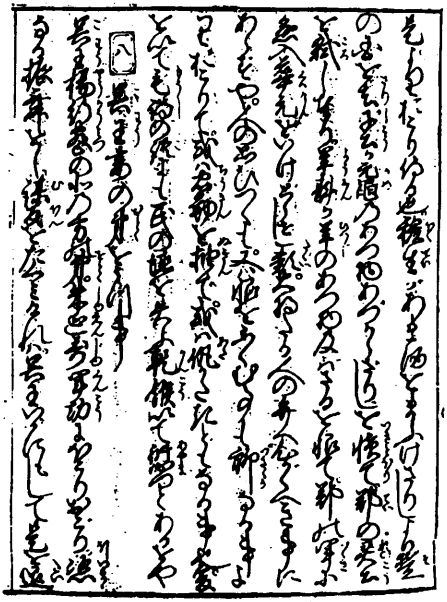
此故事はさせる黠智にもあらされは記すへき程の事ならね共今時沙門の女色にふける事俗家よりも猶甚しけれは此僧の淫乱よく相似たりしに貧儒のたやすく打ころせる所いと快事に思ひ筆のすさひに書付侍る也よくいひて浮屠を防ぐものは聖人の徒ならさらめやは

本章に関する限り、この説話が採られた理由は智恵の見事さというよりも、悪僧が打ち殺される小気味よさからなのであった。こうした章段が本書の最終話に据えられている事

【図版二】巻五の七話末（十丁裏）

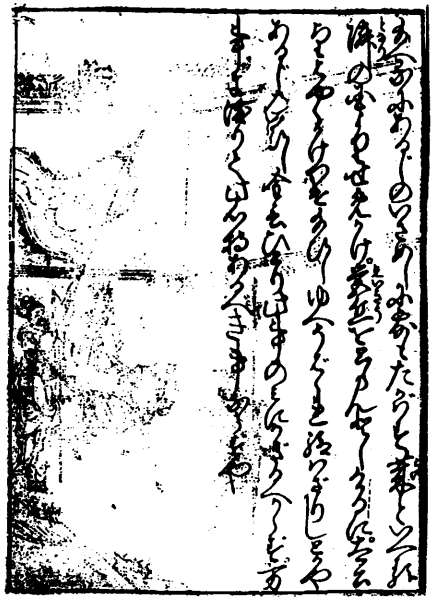


東　大　本

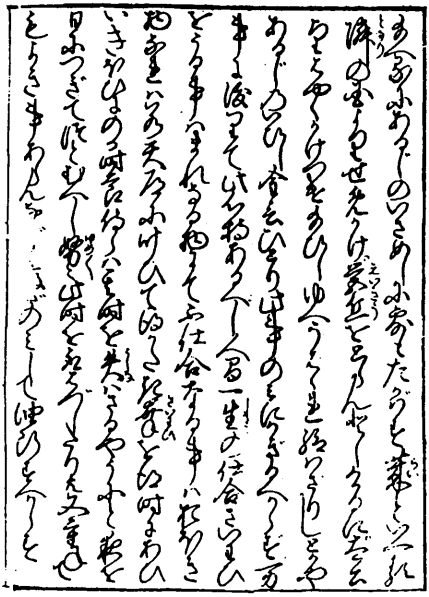


小嶋修訂本（京大本）

【図版三】巻二の一（四丁表）



東　大　本



小嶋修訂本（京大本）

は、本書の編集意識を考えるに際しては重要な事と思われる。従来本書は『智囊』など中国古典の摂取という点から光があたる事が多かったが、その全話が収められている訳ではなく、取捨選択には自ずと編者の意識が顕れている筈である。こうした方面の分析からも『智恵鑑』の新たな面が見えてくる事であろうが、書誌を中心とする本稿にはそこまで言及する紙幅が許されていない。

〈三〉に分類した巻二の六「漢の丙吉牛の喘ぐを問るゝ事」は、ひとたび書いた話末評語を改めたものである。

漢の宰相丙吉(へいきつ)が外出の時、路上にあった斬殺死体には目もくれず通り過ぎたのに、牛が舌を出して歩いているのを見ると、車を停めて牛飼いにその故を尋ねた。従者が不審に思い丙吉にその理由を問うと、丙吉はこう答えた。闘諍喧嘩は町奉行の任である。この気候の良い時期に牛が舌を出して喘いでいるのは天地の気が和しない故かと案じたのである。政治の善悪によって、天地の気・万民の安堵を心がける事こそ宰相の心がけるべき事である、と。

これに付した元甫の評語ははじめ次のようなものであった。

まことに百官百僚それ〳〵のつかさとれる役〻ある物なれは国老ともそなはりたらん人の勘定奉行台所横目などの役を心がけてそろばんのせんさく味噌塩の吟味迄せられんはたつとき徳にはそなはりなから。そのたつとき所をしられさるおろかなる心なる故。みつからは君の御ためと思はるべけれ共かへりて不忠となりゆき侍るべし

いっぽう修訂後は、「味噌塩」以下に次のような改変がなされる。

味噌塩の吟味を詮要とせらるへき事にあらす。よし聚斂の利勘を専として財宝あつまるといふとも財あつまれは民散ずる道理なれはかへりて不忠となりゆき侍るべし

初稿は、徳により重大な任務についた人物が味噌塩の吟味まで兼ねるのは、自らの能力・責務を知らない事であり、たとえ本人が君主の為と思っても不忠である、とする。一方修訂後は、大役を疎かにしての収斂の利勘、すなわち蓄財に走る為政者に対する諫めとなっている、とまとめれば良いだろうか。なぜかような改編に及んだかは即断しがたい。

五　おわりに

以上、『智恵鑑』の初期における諸本関係について見てきた。

渡辺憲司「辻原元甫略譜」(注14)は辻原元甫の伝記、特にその仕官の有様を調査して有益だが、それによれば、元甫ははじめ桑名藩に仕えたものの、藩主松平定綱没後に致仕した。それからほぼ一〇年間、四〇歳の寛文四年に淀藩石川憲之の許へ仕えたという。そして渡辺稿は次のように指摘する。

元甫の名を著名にした仮名草子を書いたのはこの一〇年間である。明暦二年刊「女四書」、万治元年刊「倭小学」、同年刊「見ぬ世の友」、万治三年刊「智恵鑑」、いずれも元甫が三十五歳より三十九歳までのことである。おそらくこの間、元甫は出仕せず浪人の身ではなかったかと思われる。

このようにきわめて集中的に仮名草子著作があった事、またそれが浪人時とほぼ軌を一にしている事は、この期の教訓物仮名草子のありかたを考える上で興味深いものである。本稿では元甫の著作の一つ『智恵鑑』について見てきたに過ぎないが、これを足がかりとして、元甫の他の著作の諸本関係、またこの時期における小嶋弥左衛門刊の書物への元甫の関わりなど、今後検討してゆくべき課題は多いように思われる。

注

1 昭和二二年一〇月　養徳社。
2 「言語と文芸」九　昭和二九年六月。
3 「国語国文学研究」一一　昭和五一年三月。
4 平成七年一二月　岩波書店。
5 昭和四五年　岡山大学附属図書館。
6 昭和五九年七月　岩波書店。
7 平成一〇年六月　明治書院。
8 天理図書館本については『天理図書館稀書目録　和漢書之部四』（平成一〇年　天理大学出版部）に書誌が存する。なお本書は巻二のみ別本より補った取合せ本である。
9 『大英図書館蔵日本古版集成マイクロフィッシュ版』（平成八年二月　本の友社）に拠った。
10 表紙青色無地、二六・〇㎝×一七・二㎝。題簽後補、左肩に子持刷枠墨字、一五・三㎝×三・〇㎝。印記「青洲文庫」、「東京帝国大学印」。裏表紙に書入「雲樵堂蔵」。
11 天理本の巻二は後印本を補ったものである故、◆印は施さなかった。
12 巻七は丁付に修訂が存する。東大本では「一」～「卅三」「卅四至六」～「四十五」と飛び丁があったのに対し、小嶋本では「一」～「四十三」と修訂されている。異同表の丁付は修訂本に従った。
13 所見の後印本には「二条通玉屋町上村次郎衛門刊行」との陽刻を残したまま奥付に「京都書林／京極通五条上ル町／天王寺屋市郎兵衛板」「天保二年辛卯三月穀旦／皇都書林　天王寺屋市郎兵衛」などと付すものがある。また東大本の一本（E24／1391）は、陽刻の刊記を削って大坂敦賀屋九兵衛他十三肆連名の奥付を付し、題簽・見返しに『智恵鑑図会』とする。なお、先述した通り『日本古典文学大辞典』では「この場所に他書肆名を入木した後刷本」としていた。だが所見の範囲では、奥付を貼付けるものはあったが、跋文欄外に入木を施したものは見られなかった。なお調査を継続したい。
14 「江戸時代文学誌」一　昭和五五年一二月。

（かつまた　もとい　九州大学大学院博士後期課程）